

河出文藝選書

姿なき司祭ソ聯東欧紀行

埴谷雄高

河出文藝選書

姿なき司祭ソ聯東欧紀行

谷雄高

河出文藝選書

姿なき司祭 ソ聯・東欧紀行

昭和五十一年五月二十日 初版印刷
昭和五十一年五月二十五日 初版発行

著 者 埴 谷 雄 高

装 幀 者 横 山 宏 輔

発 行 者 佐 藤 皓 三

発 行 所 河 出 書 房 新 社

東京都千代田区神田小川町三ノ八

振替口座(東京)一〇八〇二

電話 二九二一三七一一

印刷 暁印刷

製本 若林製本

©1976 YUTAKA HANIYA

埴谷雄高(はにやゆたか)

明治四十三年、台湾生まれ。

昭和五年、日本大学予科中退。

昭和二十年、同人とともに雑誌

「近代文学」を創刊する。

著書に個人全集『埴谷雄高作品

集・全6巻別巻1』(河出書房

新社)のほかに、評論集『幻視

のなかの政治』『鐘と遊星』(未

来社)など多数。昭和五十一年

四月、『死霊』(全五章)を講談

社より刊行する。

目次

姿なき司祭	5
ドストエフスキイと運転手	19
《民衆》の顔	56
セルゲイ君	80
ワルソー・ゲットー	115
レーニン・ブルヴァール	148
魔法の町	173
町のなかの国境	198
あとがき	231

姿なき司祭

——ソ聯・東欧紀行

姿なき司祭

夜汽車の場合でもそうであるけれども、座席によりかかったままの姿勢ではとうてい眠れず、自宅で寝ると同じく長く横にならなければ眠れぬたちなので、私は、そのとき、睡眠剤をのみ、たまに空いている三人分の座席に横になつていたが、頭の芯に数枚の薄暗い膜がかむせられた夢うつつの境で、ぼんやり目覚めると、飛行機は着陸するとき、異変を思わせる不規則なバウンドをつづけて、私の軀を、縁だけ固まつたジェリーのように異常に内部攪乱しながら、大きく振りまわし、弾ませたのであつた。やはりきたかな、と瞑目したまま背中に伝わつてくる小刻みな横ぶれと大きな上下動のまじえられた振動を味わっていると、がくりと前のめりしながら飛行機はやがてとまつた。

——どうせ僕がゆくのだから、飛行機の故障くらいあるでしょうね。

不吉な予感といったほどの暗い切迫感などなく、日頃からいわば「へま」ばかりを永遠の伴侶にしている自身にあらかじめ警告の鞭をあてておくといった四分の三くらい冗談の気分で、或る雑誌の対談のため訪れたA君に、出発前、私はそんなふうに述べたのであつたが、その冗談を傍らに黙

つて立つて窺っている死の神に苦々しく聞きとられて、この曉方近い暗いカルカタ空港でついに実現されるのかな、と私はそのとき閃くように思い返した。

確かに、真夜中すぎの空港の暗い滑走路は、冥府の入口に適わしい空虚な、淋しい、孤独な場所である。現代には現代ふうな冥府の入口がやはりできたものだな、と考えながら、なお瞑目している私と同じく、理由が解らぬ不安のなかで凝つとおし黙っている薄暗い機内の乗客に、やがて、車輪に故障が生じたので、代りの部品の到着まで、当地のホテルで待つていただきたいというアナウンスが告げられたのであつた。

第一番目の目的地であるモスクワへ着かない前に起つたこの偶然の出来事は、いつてみれば、或る特別な色合いの陰翳を私の旅行のはじめにつけることになつたのであつた。

私達に与えられた旅程は、東京、モスクワ直行便が満員だつたため、はじめから東京、カラチ、モスクワという変つたコースであつたが、このカルカタでの思わざるアクシデントはカラチでの乗換便を失わせ、さらにイスタンブール、ソフィア、モスクワという「より変つた」経路を私達に与えることになつたのである。そして、まずヨーロッパの入口まで達してからヨーロッパアジアへ戻るといつた、いわば東半球大圏コースとも呼ぶべきこの長い径路の採用によつて、私達のモスクワ到着は一日遅れたのであつた。

その間、曉方近く、カルカタのホテルへ向かうバスから切れ目もない移動撮影のように眺めることになつた町の歩道の上に裸かで寝ているひとびとの数限りもない群れ、暑さと貧困に由来する

そのカルカッタの《アジア的睡眠様式》について、また、イスタンブール空港で映画物語さながら遠い滑走路にあるブルガリア航空の三十人乗りの小さなプロペラ機まで空港の自動車を走らせて僅か出発数秒前にまさに間一髪乗りこんだときの不安と僥倖について、さらにまた、皆目様子の解らぬソフィア空港の雑踏のなかで出入国を扱う役人からパスポートを取りあげられてしまった絶望的な苦境についてなど、まことにことは多かつたけれども、それらは別の機会に触れることにして、カルカッタでの思わざる飛行機事故がひき起したモスクワ到着の一日遅れが、社会主義国で私達にもたらした出来事をまず記することにする。

上昇しはじめると背中が座席に斜めに傾いて押しつけられたまま軀が起せなくなるほど強烈な推力をもつたジェット機TU一一型にソフィア空港から運ばれて広いモスクワ空港についたのは、午後二時半近かつた。

ロシアでは、何処のホテルに宿るべきか、インツーリストの指示によらなければならないので、すべてのことのはじめはインツーリストのカウンターからはじまる、といった具合なのであつた。

ところで、高い大きな硝子張りの建物であるモスクワ空港の一隅にあつたインツーリストの部署は、いつてみれば旅行客が到着したときだけの臨時出張所といった恰好で、僅か二つのテーブルを横につなぎあわせ、その向う側に三人の若い係員が腰かけているといった簡素なものであつた。私とT君が、そのテーブルのはしに腰かけているもみあげの長い、眼鏡をかけた若い男の前にゆき、カルカッタでアクシデントがあつたので遅れたと述べながらパスポートを差しだすと、派手なネク

タイをつけたその若い男は、すぐ備えつけのリストを出して調べながら、書類をととのえ、即座に私達のホテルを指定するかのごとく見えた。そのとき、彼の隣りにいた、やや年輩の小肥りの男が彼に何か注意すると、注意されたもみあげの長い若い男は、急に仕事を中止してしまい、不審に思つた私達の注視のなかで、年長らしい小肥りの男が二つのバスポートを手にもつて立ち上ると、百メートルくらいある大きなロビイをはずれまでゆつくり横切り、そのつきあたりの一番奥にある部屋の扉をあけてなかへはいつてしまつた。

そして、それからの事態こそ、私とT君が、その後、あまりにも屢々、顔を見合わせながら繰り返すことになつた《カフカの状況》のはじまり、なんら説明もないためどうしてそこにそうして何時までも長くうちすてられたままになつていいのか、深海の底の古い石のように、皆目見当もつかぬ不思議な状況のはじまり、なのであつた。

十数分たつと、映画のロングショットの場面のように、遠い広間の隅の扉を開いて先程の小肥りの男がでてき、脂肪がつきかけているための自然の振舞いなのか、腰を軸にして上体を一步ごとに高く揺すりあげ前へ踏みだす両足の調子をとりながら、こちらへゆつくり歩いてくる姿が目にとまつた。長い時間をかけて近づいてくるこのやや年輩の男の黒い上着の下は襟なしの赤シャツで、ネクタイをしていないことに私は気づいた。そして、待ちもうけている私達の前へ近づいてきた彼は、普通の口調で、「ちよつと待っていてくれ」といつたのであつた。

言葉は単なる符牒にすぎず、与えられた状況のなかで恐ろしいほどかけはなれたさまざまな異なる

つた内容をもち得るといふ事態について、私達はまだこの国で何も経験していないのであつた。けれども、それ以後幾度もそのなかに置かれ否応なく納得せしめられることになつたこの《待つてゐる》事態こそ、知つてみれば、官僚主義を支える最後の柱にはかならなかつたのである。

恐らく、ロシアの民衆も、はじめはそれに苛らだち、反抗し、弾劾したのであらう。けれども、長い、長い、長い全面支配の大きな網の目のなかで、ついにこの官僚主義の堅固な枠のなかに組み入れられてしまい、ついには、手綱なしでは何処へもゆかず、直ぐ指定の白墨の円のなかに立ち並ぶおとなしい家畜のごとくに、彼等は《待つてゐる》に慣らされてしまつたごとくであつた。《待つてゐること》と《待つてゐること》がさながら電光と雷鳴の随伴する自然現象のごとくに融合したその長い、長い、長い、朝から夜中まで繰り返された慣行は、待つべき理由の明らかなきも、また、怖ろしいことに、何ら理由も明らかでないときにおいても、無言の、愚かしい無表情のなかで、ただひたすら待つてゐることを彼等に「義務」づけてしまつた、と敢えていわなければならぬ。それは、暗い意識の奥底に、肉体の隅の皮膚の一片一片に生得の資質のごとく染みついてしまい、たとえ、政府に關係することでもなく、日常生活の瑣末事においても、彼等はぼんやりした鈍い無気力のなかで「自由意志」によつて《待つてゐること》を繰り返すようになってしまつたのである。

その後の私達は、ホテルでも、レストランでも、商店でも、タキシード駐車場でも、絶えず《待つてゐる》ひとびとの無生氣な「善良」な表情に屢々直面しなければならなかつたが、このモスクワ空港ではまだ《待つてゐる》ことの隠れた意味を知らなかつたのである。

「ちよつと待つてくれ」と告げられてからすでに一時間近くたつた。次第に波立つてくる苛らだちを抑えきれなくなつた私が簡素なテーブルを二つ並べたインツーリストの臨時出張所へまた近づくと、一番はしにいた長いもみあげの若い男はすでにいず、また、反対側のはしも空席で、先程私達のパスポートをとりあげて遙か遠い奥の部屋へはいつた小肥りの赤シャツだけがただひとり両手をポケットにつきいれた変つた姿勢のまま前屈みに書類を見ていたが、「まだ時間がかかるのか」という私の苛らだつて棘のある語調に視線をあげたものの、たつた一人のこつた最後の窓口である彼は、先程とまつたく同じことを、同じ調子で繰り返しただけで書類に目をおとしてしまつた。

白く長く一直線につづいた道路や、高い樹立ちの列や、遠い原野など、「ロシア的郷愁」をそそる風景が、大きなよく磨かれた透明な硝子を通して空港の外に見えるロビイの中央の長椅子に腰をおろした私は、不機嫌な苛らだちが胸の何処かの隅で破れて、もはや、腹だたしさへ移つてゆくような気分を覚えた。私の苛らだちには理由があるのであつて、到着が一日遅れたため、まだのこつているこの午後の時間を全部使つて、いまは博物館になつていふというドストエフスキイの生家を訪れる予定をあらかじめたてていたのに、それが困難になりそうに懸念されてきたからである。

ところで、ソフィアからの私達の飛行機がこの空港に到着する最後の便だつたらしく、赤や青の鮮やかな色彩で飾られた枡がたの土産物の売店や半円形の窓口だけが覗かれる銀行の前をそれまで往来していたひとびとは何時のまにかいなくなつてしまひ、広い空港の果てまで見渡しても不思議なほど乗客の姿は眺められず、私達だけが急にのこされてしまつた無人の空港の風景は、いいしれ

ぬ不安をかもしれないように思われた。

さらに三十分たつた。

青空に白い雲が浮んで高い樹の梢にかかつている空港のそとのロシア的風景から眼をもどして立ちあがつた私は、インツェーリストの臨時出張所へまた近づくと、こんどは怒りの気色も隠さずに、「何をしているのか。どうしてこんなに時間がかかるのか」と訊いた。このがらんとした広い空港のなかにのこっている唯一の頼るべき相手である赤シャツは、先程からその姿勢をつづけていたのかどうか解らないけれども、ポケットに両手をいれたまま、ゆつくりと目をあげると、「まだ待つてくれ。チーフが決定する」とこれまた短く答えた。

この「チーフが決定する」という新しい事態が出現してきたとき、私は、はじめて、不意と、ぼんやりした薄暗い輪郭をもつた国家権力の目に見えない畏にかかつているかのごとく感じて、誰もそこに立つていない売店や食堂のある空港のはずれまでもう一度仔細に眺め渡した。

この待合室を兼ねたロビーになつて大きな広間には、二階の到着室から降りてくる高い階段が二箇所あつたが、私がその近い一つに目をやると、階段を支えている大きな角柱の蔭に、目の荒い背広を着た、恰幅のいい、四角い顔立ちをした中年の男がこちらを見るともなく眺めながら立っているのに気づいて思わず胸の暗い奥で何かが高く叫んだ。想い返してみると、レスリングの選手を思わせるこの恰幅のいい、顎の張つた男は、私達が最初にインツェーリストの簡素なテーブルの前に立つたときからそこにいたのであつて、見た瞬間に直覚するというより、漠然と暗い想いをこら

したあとにようやくぼんやり推知するといった型の、直観型ではない私も、やつとそのとき、夏のモスクワで背広をきちんと着てネクタイまでしめているその頑丈なレスラーふうな軀つきの男がまぎれもなく空港づきの「私服」なのだと思ついたのであつた。そして、そう不意と気づいたとき、それが何処の国にせよ、権力機関の一員にそれとなく見張られている暗く忌まわしい不吉な感じと同時に並んで、ここに待つていろとそちらからいわれたからこそ誰もいなくなつてしまつたこの空港のロビーにぼんやり所在もなげに待つていたのであつて、そうした私達がそれとなく監視されるのは筋道がまさに逆ではないか、と急に無性に腹立たしくなつてくるのであつた。どちらかといえば、日頃は、「おとなしい」らしい私も、ドストエフスキイの生家訪問の時間が無駄に失われてゆくことにいわば無数に泡だつ沸騰点に達するほどの心の動きが激しく波立つて、長椅子の隣りに坐つてゐるT君に、こんどは君が行つてきてくれ、とぶつきらばうにいつた。あからさまな暗い不機嫌をかくさぬその私の昂ぶつた気配がT君のやはり重苦しく、鋭くささくれ立つた神経を刺激したのだらう。こんどは代つてT君が赤シャツの前へたつと、たつた一組とりのこされた私達のとめどもない困惑ぶりに同情したのか、それとも、何時までたつてもとうていあきらめそうもないしつこい間歇攻撃がうるさくなつたのか、もう一度たち上つた彼は、彼の特徴である腰を軸とする前揺れの調子をとりながら、広いロビーをゆつくり横切つて、一番奥にある部屋の扉のなかへはいつていった。けれども、暫らくして姿を現わした彼は、喜ばしい変化を期待してまちもうけている私達の方へ真直ぐ向つてこず、また、こちらへまつたく視線を向けもせず、さながら遠い舞台の上の無人の

空間を一人の通行人が単なる舞台効果のためだけに横切つてゆくように、そのはじめからそのおわりまで私達から同じ無視の距離をたもつたままゆつくりと歩みつづけて、そして、どういうわけか、そのまま何処かへ行つてしまつたのであつた。ついに私達が頼るべき相手は、この大きなロビイのなかに誰もいなくなつてしまつたのである。

いまや私達が凝つと眺めつづけるべき対象は、広いロビイの一番はずれに見える遠い「秘密」の部屋の扉だけになつてしまつた。そこへはいり、そこから出てきた小肥りの赤シャツが述べた「待つていてくれ」という短い通告のほかの唯一の内容あるまとまつた言葉は「チーフが決定する」であつたが、恐らくは、その遠い一枚の扉の向うに不思議な構造のからくりを備えた《神託》の部屋があつて、そこに私達の運命をこまかな隅々まで左右する最後の決定者が、古い神権時代だけ見られる敵めしい顔付をして坐つてゐるかのごとく思われるのであつた。

そして、インツールリストの臨時出張所のテーブルの前に私達が立つたときから意味もなく、理由も解らず《放置された時間》が約三時間たつと、私自身思いがけないことに、私のそれまでの棘のささつたような苛らだちやとめどもない無性な腹立ち、さながら赤い色調に塗られたスライドのはしでも軽くおされて突然予告もなく全面暗灰色のスライドといきなりいれかえられたように、底もしれぬ暗い掂がりをもつた怖ろしい不安に不意と變つたのであつた。それは、このがらんとした人氣もない空港の隅の目に見えない何処かで、姿もかたちもまつたくない誰かが、ただただ理由もなく長く放置しておくというだけの《無操作の操作》によつて、私達のとりとめもない気分を、棘

のささつた苛らだちから無性な腹立たしさへ、そして、無性な腹立たしさから一転して暗い拡がりをもつた怖ろしい不安へと、一瞬の絶えまなくひきつづいて揺り動かしてみろ《頼りない感情の推移》の奇怪な実験でもしているかのような印象であつた。そして、特高警察の時代のなかにいた私達の年代にだけ特有な「馬鹿げた」懸念として、これはひよつとすると、理由などない故にこそいきなり《逮捕》されてしまうのではあるまいかといった突飛な暗い懸念さえ、そのとき、抑えに抑えきれず、思い浮んでくるのであつた。

二階へ通ずる階段の蔭をふと眺めると、その不吉な暗い想念を支える一本の重々しい柱のように、私に先にそう命名された「私服」は、雪のなかに平然と坐りこんでいる鈍い大熊といった趣きで、執拗なジャベル警部のようになおそこにぼんやり立っているのであつた。

もはや、遠いロビイのはずれに一枚の扉だけ見えていて、そこから「秘密」の神託をくだす特殊な遠隔操作でもしているとき《あの部屋》の内部を敢えて積極的に覗いてみるより仕方がないのであつた。私の突飛な馬鹿げた懸念にひどく驚き、駆りたてられてその遠い部屋へやがておもむき、はいり、そして、扉を開いてでてきたT君は、さながら抽象的な《神託》を司どる一政府機関であるこのインテリリストの本拠と具体的な一般乗客である私達の最短距離の証明でもするように一直線に面もそらずこちらへ戻つてくると、急ぎこんで私にこう報告したのであつた。

「あすこにはたつた一人しかいませんよ。その男は懸命に何処かへ電話をかけつづけているんです。聞いてみると、その電話のなかで、何度も繰り返し返して、ツジ、とか、ハンニャ、とかいつてます」